

## 子どもが読書に親しむための取組・活動の方法等

子どもが読書への関心を高められるような取組・活動を行うことで、子ども自身が自ら進んで、読書を行っていくことができるよう、Ⅰ「つたえる」（読書の楽しさ等を伝える取組）、Ⅱ「しらべる」（本を活用し、様々なことを調べながら、読書への興味・関心を高める取組）、Ⅲ「ささえる」（読書活動を様々な面からサポートしていく取組）の3つに分類し、「読み聞かせ」「ブックトーク」「ビブリオバトル」など、19の取組・活動の方法等について説明しています。

また、実際の活動事例では、これらの方法を組み合わせた効果的な取組もあります。

取組・活動の方法から、具体的な事例をご覧ください。各欄の右上に、事例の掲載がある取組の主体を記載しています。例えば、「家庭」での取組は「家」と表記し、右下に取組主体・事例番号・掲載ページを記載しています。また、事例の掲載はないが、取り組むことができる主体を、例えば、「地域」での取組は「地」と表記しました。

取組の主体 ⇒ 「家」：家庭 「地」：地域 「学」：学校等 「専」：専門・関係機関及び団体等

### Ⅰ つたえる

#### 読書の楽しさ等を伝える取組

##### ファミリー読書

家

子どもが本と出会い、本の楽しみを知るためには、家庭の役割が大変重要です。家庭で子どもと一緒に本を読んだり、図書館に出かけたりすることが、その後の子どもの読書習慣に大きな影響をあたえるとともに、家庭での読書活動の取組は、家族間のコミュニケーションを深めることにもつながっていきます。

家庭は子どもが本と初めて出会う大切な場所です。家庭での読書活動例の紹介などにより、家庭における子どもの読書活動の意義や重要性について、広く理解してもらうことが大切です。

県教育委員会では、毎月第1日曜日を「ファミリー読書の日」と位置づけ、ファミリー読書の重要性について周知をしています。

⇒「家」事例①（P10）

##### レビューブック

地 学

本の紹介文のことをレビューといい、そのレビューをまとめたものをレビューブックといいます。

レビューブックを友達に見せることで、レビューブックを見た子どもが、その本に興味や関心を抱き、今まで読んだことのない本に出会う機会へとつながります。

⇒「地」事例③（P 14）

## ブックスタート

家 地

1992年（平成4年）にイギリスで始まった保護者に絵本を渡す事業で、赤ちゃんに対して絵本を読み聞かせ、親子の心のかよひ合いを深めることを目的にしています。日本においても市町村を中心に、乳幼児健診時などに絵本を渡し、子どもと本とをつなぐとともに、保護者への啓発の機会にもなっています。



⇒家事例②（P 11）

## 読み聞かせ・読み語り

家 地 学 専

一人または複数の子どもに対し、声に出して本を読むことです。

＜子どもにとって、本を読んでもらうこととは＞

- 温かで楽しく豊かな体験。
- 読み手と心を通わせる楽しく幸せな時間。
- 子どもが人としての心を育てるときの糧となるもの。
- 読んでもらった本は、読み手と一緒に子どもの心に深く入り、長く残るもの。



＜本を読む時のポイント＞

- 本の選び方。
  - ・子どもの成長にあったもの。
  - ・子どもの気持ちに寄り添ったもの。
  - ・未知の世界への好奇心や既知の世界の安らぎを満足させるもの。
- 一緒にいることを喜び、心から楽しむこと。
- 「読んで」と言われたら、何度でも読んであげること。

⇒地事例⑤（P 16）、学事例⑨（P 23）、学事例⑭（P 28）

学事例⑰（P 33）、専事例⑳（P 40）

## 朗読

家 地 学 専

朗読とは、詩歌や物語など、その作品の内容をくみとり、声に出しながら、感情をこめて読むことです。臨場感や登場人物の心情を考えながら読むため、読み手も聞き手も、よりその世界を想像しながら読む（聞く）ことができます。

⇒専事例㉔（P 44）

## 創作劇

地 学

創作劇とは、作者の創意によって日本語で新たに書かれた戯曲のことをいいます。ここでは、園児、児童、生徒が発表会等で劇を行う際、絵本や物語を自分たちで創ったり、登場人物のセリフを考えたりする活動のことをいいます。

⇒学事例⑩ (P 24)

## ブックトーク

地 学

本への興味が湧くよう、あるテーマに沿って関連付けて、工夫を凝らしながら、第三者に複数の本を紹介することです。

子どもにとって、本と出会うきっかけになり、また、テーマに沿った様々なジャンルの本を知るきっかけにもなります。

⇒地事例④ (P 15)、学事例⑬ (P 27)

## ビブリオバトル（書評合戦）

地 学 専

発表者が読んでおもしろいと思った本を一人5分程度で紹介し、その発表に関する意見交換を2～3分程度で行います。すべての発表が終了した後に、どの本が一番読みたくなったかを参加者の多数決で選ぶ活動です。

⇒学事例⑳ (P 36)、専事例㉔ (P 42)  
やってみよう1 (P 50)

## 読書の秘訣カード

学 専

読書の秘訣カード「Life with Reading」は、カードを利用して、これまでの読書推進とは異なる新しい方法で読書支援をするためのツールです。それは、読書のコツや楽しみ方を「言語化」することで、読書について考えたり、コミュニケーションを図ったり、実践したりすることを支援するアプローチにもなる方法です。

⇒専事例㉕ (P 43)、やってみよう2 (P 51)

## Ⅱ しらべる

本を活用し、様々なことを調べながら、読書への興味・関心を高める取組

### 調べ学習・探究学習・課題研究



調べ学習や探究学習とは、テーマ（自分が疑問に思ったことや興味・関心を持ったこと等）や与えられた課題に対して、情報を収集し、それに自分の考えを加えたり分析したりして、研究し、まとめていく学習のことをいいます。最後に、学習の成果を発表（プレゼンテーション）します。

この学習は、課題解決に必要な思考力・判断力・表現力等を養い、生涯を通じて学ぶための力にもなります。

情報を収集する手段としては、本、新聞、雑誌等があげられます。

図書館には、必要な本や新聞、雑誌等が備わっているため、調べ学習を行うことで、図書館の利用へとつながっていきます。

また、高等学校では、総合的な学習の時間の中で、課題研究を行っています。課題を設定し、その課題の解決を図る学習を通して、専門的な知識と技術の深化、総合化を図るとともに、問題解決の能力や自発的、創造的な学習態度を育てる取組です。



⇒ 事例⑮ (P 29)、事例⑱ (P 32)、事例⑳ (P 34)

### 読書のための様々な教材の活用



平成 29 年告示の小・中学校学習指導要領「国語科」の内容では、「自ら進んで読書をし、読書を通して人生を豊かにしようとする態度を養うために、国語科の学習が読書活動に結び付くよう発達の段階に応じて系統的に指導すること」が求められています。

そこで、授業で学習している内容に関連した本や、同じ作者の作品を読むなど、必然的な本との出会いの場を提供していくことで、子どもの読書への興味・関心が高められます。



⇒ 事例⑪ (P 25)

### Ⅲ ささえる

#### 読書活動を様々な面からサポートしていく取組

##### 地域・学校連携



子どもの読書活動や学習を支援するため、学校（幼稚園、こども園、小学校、中学校、高等学校、大学、特別支援学校等）と市町村立図書館が、市町村立図書館の本や資料等を学校へ貸し出したり、高校生や大学生が市町村立図書館のイベントや運営等にかかわったりするなど、相互に協力して取り組むことをいいます。

⇒事例⑥（P 17）

##### 読書手帳・読書マラソン



図書館の読書手帳は、図書館利用者が、図書館で自分の借りた本の履歴を記録するために図書館が提供する冊子のことをいいます。

図書館システムから受け取る貸出データをもとに、貸出履歴を専用の機械で印字するタイプや、手書きで利用するものなど、いくつかのタイプに分けられます。

読書手帳を用いることで、図書館利用者の読書意欲の向上効果があると言われています。

また、名称を読書マラソンとして、読書の履歴を記録していく取組もあります。

⇒事例⑧（P 19）、事例⑫（P 41）

##### 移動図書館



移動図書館とは、書籍などの資料と職員を載せた自動車や船などを利用して、図書館を利用しにくい地域の人のために各地を巡回して、図書館のサービスを提供する仕組みのことをいいます。

図書館が近くにない地域に住んでいる子どもにとっては、本にふれることができる良い機会となっています。



⇒コラム（P 20）、事例⑬（P37）

## POP コンクール

地 学

子どもが、自分のおすすめ本を紹介する方法としてPOP（ポップ）を作成し、その中から優秀なPOPを決める取組です。

POPとは、「Point of purchase」の略語です。書店等で本の宣伝・広告として用いられている媒体のことをいいます。

POP作りは、読書の好きな子どもはもちろん、そうでない子、例えば漫画やイラストが得意な子どもなどに対しても、読書に誘う有効な手段です。

また、展示された作品を鑑賞することで、今まで出会ったことのない本に出会う機会や、普段は借りられていないような本でも、関心をもってもらう機会を提供することにもつながっています。

⇒地・学事例⑩（P 30）

## 調べる学習コンクール

地 学

図書館を使った調べる学習は、知的好奇心、情報リテラシー、読解力、思考力、言語力が磨かれる学びです。公益財団法人図書館振興財団では、学校教育や生涯学習の場とし、ますます多くの方が図書館を活用することによって生きる力を身につけ、それにより図書館が振興することを願い、コンクールを行っています。

図書館を使った調べる学習コンクールの目的

「調べる力」を育てる

～調べることで「生きる力・考える力」を養う～

⇒事例地⑦（P 18）

## 委員会活動・学校図書館運営



平成 29 年告示の小学校学習指導要領「特別活動」では、児童会活動（委員会活動も含む）の目標として、「学校生活の充実と向上を図るための諸問題の解決に向けて、計画を立て役割を分担し、協力して運営することに自主的、実践的に取り組むこと」が掲げられています。

そこで、図書委員会など学校図書館の運営に関わる委員会等の活動として、全校児童・生徒が利用しやすい図書館にするために環境の整備等を行うなど、子ども自身が、学校図書館の運営に携わることで、子ども同士による読書への啓発活動につながっています。



⇒事例⑫（P26）、事例⑰（P 31）、事例⑳（P 35）

## 読書週間



終戦まもない 1947 年（昭和 22 年）、まだ戦火の傷痕が至るところに残っているなかで「読書の力によって、平和な文化国家を作ろう」という決意のもと、出版社・取次会社・書店と公共図書館、そして新聞・放送のマスコミ機関も加わって、11 月 17 日から、第 1 回『読書週間』が開催されました。そのときの反響はすばらしく、翌年の第 2 回からは期間も 10 月 27 日～11 月 9 日（文化の日を中心にした 2 週間）と定められ、この運動は全国に広がっていきました。

さらに、2005 年（平成 17 年）に「文字・活字文化振興法」が成立、公布、施行され、『読書週間』が始まる 10 月 27 日が、「文字・活字文化の日」とされ、読書活動をとりまく施策のより一層の推進が期待されています。



読書週間マーク

〈公益社団法人 読書推進運動協議会 HP より〉

⇒事例⑫（P 26）

## こどもの読書週間

1959年（昭和34年）にはじまったのが、「こどもの読書週間」です。

第1回は、日本書籍出版協会児童書部会が中心となり、「こども読書週間」として、4月27日～5月10日の日程で開催されました。

翌年の第2回より、読書推進運動協議会が主催団体となり、名称を「こどもの読書週間」、期間を5月1日～14日（こどもの日を含む2週間）と定められました。

「こどもの読書週間」は2000年（平成12年）の「子ども読書年」を機に、現在の4月23日～5月12日の約3週間に期間が延長されました。

4月から5月にかけては、「国際子どもの本の日（4月2日）」「サン・ジョルディの日（4月23日）」などの記念日・関連イベントも多く、また、2001年（平成13年）12月に公布・施行の「子ども読書活動推進法」により4月23日が「子ども読書の日」となった影響もあって、「こどもの読書週間」は年々大きな盛り上がりを見せています。



こどもの読書週間マーク

<公益社団法人 読書推進運動協議会 HP より>

⇒学事例⑫（P 26）